



TITLE:

静脩 Vol. 4 No. 6 (1968.3) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 4 No. 6 (1968.3) [全文]. 静脩 1968, 4(6)

ISSUE DATE:

1968-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65923>

RIGHT:



静脩

1968年 3月

Vol. 4, No. 6

The Kyoto University Library Bulletin

小さな図書館

宇野豊三

火災のお陰といえば甚だ不謹慎ではあるが、薬学部にも小さいながら図書館が建った。昭和37年暮の火災で図書室が全焼したときは私は全く茫然自失した。焼け残った図書もいくらかはあったが、水をかぶっては、姿はそのままでも紙が互にくっついて使用に耐えない。図書を失った学部は実にみじめという他はない。図書館の復旧は急を要するが、また一面改革するとすればこの時をおいてない。限られた経費の中でのやりくりは、かなり気が重かった。

部局の図書館は研究図書館としての機能を最大限に発揮することがその主要な使命であると私は考えている。勿論経済的に余裕があれば、教育用の図書もそろえたいが、そのような余裕はとてもありそうにない。他部局にあるものを集めることはやめて、他部局にない図書を集めるようにしたら、という御忠告もいただいたが、元来自然科学系では、多くの雑誌から必要な文献をあさることが多いので、手元に雑誌があるということが重要なのである。特に薬学は地の利が悪く、いちいち他部局に出向いているようでは仕事にならない。父親が英語の辞書を持っているから、子供はそれを借りて使えばよいといっても、子供は承知しないのと同じで、たとえ重複しても必要な図書はそろえなくてはならない。何回かの図書委員会での協議の末、使用頻度の低い古い図書は一切割愛し、最近10年間のバックナンバーに復旧の重点を置いた。マイクロフィルムも使用頻度の高い図書については不便でこれも採用しなかった。

私は数年前パリ大学の薬学部の図書館を見学したことがある。地下の書庫にある膨大な蔵書に驚いたが、自然科学系ではこの古い本の利用がどの位あるかを思うとき、私のうらやましいという感じは薄らいだ。

学術雑誌の数が年々恐しい勢で増加するとき、この新しい図書館の書架も10年もたてば古い蔵書の処置に困ることになる。書架の間を歩きながらいつもこのことが気にかかる。

図書館の近代化が叫ばれ、情報サービスが重要な問題となっている。このことは充分心懸けているつもりではあるけれども、結局予算と人員の問題にぶつかる。許される範囲で徐々に情報サービスの仕事を拡げて行く他はないが、それ以前に限られた人員で仕事の能率を上げるには、他部局図書室ならびに中央図書館との連絡事務の簡素化の実現が必要である。

ともあれゼロックス複写も年間10万枚をこえ、この小さな図書館は、それなりに十分に機能を発揮している。私は決して大きな図書館をうらやましく思っていない。(薬学部教授)

諸外国の研究所図書室(Ⅱ)

占 部 実

前回はアメリカの二つの研究所について述べたので、今回はヨーロッパ諸国の研究所について述べてみよう。

ヨーロッパで私が勤務したのは、英国の Teddington (London の郊外) にある National Physical Laboratory (略して NPL) であった。この研究所は英王室が Newton の功績をたたえてつくった研究所で、現在は国立研究所になっている。所内には Newton が万有引力の法則をそれから発見したといわれている低い林檎の木が立っている。イギリス人の所員から聞いた話では、これはしかし眉唾ものだ、ということであった。この研究所は巨大な研究所で、現在は各種の部門をもっている。1964年 MRC の勤務が終ってから、私はこの研究所の数学部門に勤務したが、ここは英国の電子計算機の開発をやっているところで、所員は数値計算の専門家ばかりであった。所員はほとんど専任で、私が勤務したとき客員所員は私だけであった。ここでの研究は実際の計算方法の研究で、この点ヨーロッパ大陸諸国とは大分様子が違っていた。

この数学部門は一つの図書室をもっていたが、研究の分野が数値計算であるので、蔵書もその方面のものが主であった。しかし数値計算に関する限り、単行本、雑誌類は、共産圏諸国のものまで含めてほとんど洩れなく集められており、これには全く感心した。

NPL にいた学者でアメリカに渡った人が多く、現在の所員等にもこれらの人々からの勧誘がつねにあるようで、お茶のときにはよくこのことが話題にのぼった。頭脳流出はまさに世界的現象ということである。

最後に、私が訪問した共産圏諸国の研究所について図書室の模様を簡単に述べておこう。

ソ連のキエフにあるウクライナ科学アカデミーは、1961年非線形振動の国際学会がそこで開かれたので、訪問する機会を得た。ソ連では、共産圏諸国のものは言うまでもなく、西欧諸国のものも中央機関を通してどしどしはいつているので、図書の蒐集に関する限り、おそらく世界中で最も有利な立場にあるのではなかろうかと思われる。ウクライナ科学アカデミーの図書室では、欲しい書物をたくさん見かけたが、いずれもすでに絶版で、何とも手のほどしようがなかった。

1964年 NPL の勤務が終ってから、友人を訪ねながら、私はブラハ、ワルシャワ、クラクフ、ブカレストの科学アカデミーを訪問した。これらの科学アカデミーはソ連のそれとは違って規模も小さく、所員は大抵所在地の大学に兼務していて、図書室も科学アカデミー自身のものでそう大きくはなかった。建物の関係もあってか、所員の各研究室に図書がならべてあるところも少くなかった。もちろん、大学の図書館は相当の蔵書を持ち、みな堂々としていた。ブカレストの大学では、教室の入口のところに、教授の学位論文やその著書が陳列してあった。学位論文はほとんどフランス、イタリア、ドイツあるいはソ連で提出されたものであったが、いずれにせよ論文や著書が陳列してあっては、教授はのんびりしているわけにはゆかないだろうし、学生に対してはまたこの上ない励みになるであろうし、ともかくきわめて面白いことであると思った。

私は現在、共同利用の数理解析研究所に勤務しているが、静脩第4巻第4号に福原所長が述べておられる通り、共同利用研究所としての私達の図書室の任務はまことに重大である。蒐集計画は全国的視野に立って行なうべきであるし、また全国の大学図書館相互連絡の要として情報センターの役目も果さなければならない。海外勤務の体験から得たものを生かして、私は微力ながら図書室の発展に寄与してゆきたく思っている。(数理解析研究所教授)

資料紹介

○ 教官文庫(1月15日以後3月までの御寄贈分)

「日本政治・外交史資料選」猪木正道(法学部教授)編 有信堂 昭42刊 354p.

「家族法関係判例研究文献目録」追録(3) 太田武男(人文科学研究所助教授)編 昭42刊 72p.

「毎木調査における工期と作業形態および疲労との関係」佐野宗一(農学部・同附属演習林教授)著 財団法人阪本奨学会 昭42刊 97p.

「低開発国経済論」松井 清(経済学部教授)著 有信堂 昭42刊 254p.

「禅院の建築」川上 貢(工学部教授)著 河原書店 昭和43刊 269p.

「桑原武夫紀行文集 第1巻: フランス, アメリカ, 日本」桑原武夫(名誉教授・人文研)著 河出書房 昭43刊 377p.

「思想史と現代」河野健二(教養部教授)著 ミネルヴァ書房 昭43刊 234p.

記事訂正: 前号記載中「社会人のための応用経済学」馬場正雄(経済学部教授)とあったのは、(経済研究所教授)の誤りでしたので、ここにお詫びして訂正いたします。

○ American Men of Science : a biographical directory. Edited by The Jaques Cattell Press. 10th ed. 5 vols. N. Y., 1960-'62. (現代アメリカ合衆国科学者総覧)

これはアメリカ合衆国およびカナダにおいて現在活躍中の新鋭科学者約120,000名を収録した人名録である。

内容的に

v. 1~4 : The physical and biological sciences. (A-E ; F-K ; L-R ; S-Z)

v. 5 : The social and behavioral sciences. (A-Z)

の2つに分れ、前者は物理学、生化学、化学薬学、医学、微生物学、遺伝学、植物学、農学、森林学、畜産学、数学、工学、冶金学、地質学、天文学などの、所謂自然科学者を、後者は経済学、社会学、法律学、統計学、心理学、地理学、人類学の各分野における専門学者を網羅している。

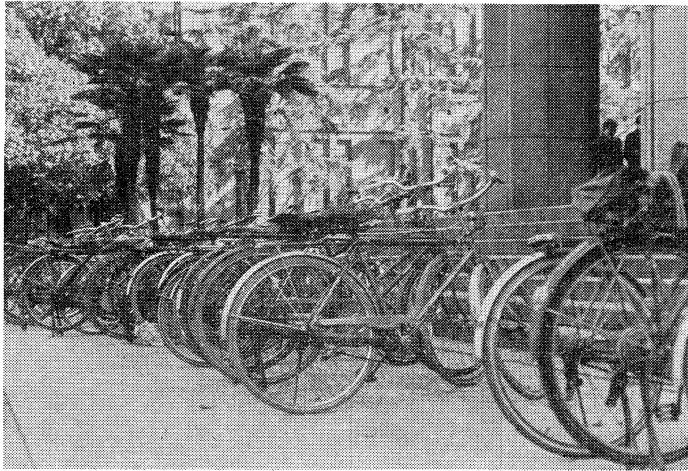
いずれも人名によるアルファベット順に配列され、出生地、出生年月、専門研究分野、学位、地位、前任地位、会員資格、住所などが詳細に記述されている。

なお、現在本館は新しい第11版のうち、v. 2~5 : D-Sr (The physical and biological sciences) '65~'67 の4冊も持っている。第6巻は今年の12月に出版の予定であり、The social and behavioral sciences も完成すると約150,000名の科学者が収録されるはずである。

○ **Diccionario Enciclopédico U.T.E.H.A. Union Tipografica Editorial Hispano Americana, Mexico. 1950-1952. 10v. il.** (スペイン語で書かれたメキシコの百科辞典)

アルファベット順に約 500,000 項目が収録されている。範囲は地理、伝記、科学等の全般にわたっているが、特にメキシコとラテンアメリカに重点がおかれている。

Apendice (補遺) 2 冊が1964年に出版され巻末には物故者の命日表が附随している。



図書館とマイ・カー

図書館を
利用して

私自身図書館をそう多く利用したわけでもなく、またその少ない図書館の利用といっても、閲覧室に幾度か行ったのみである。それでも長い四年の間には、図書館についての色んな思い出も残っているし、そこには四季折々の姿があった。

教養時代にこの閲覧室に訪ずれて最初に感じたのは、まず部屋が大きかったことである。教養部にある二、三の図書室とはまるでちがっていた。そのころのフラフラと遊び廻っていた私の気分とはウラハラに、みんな真剣な顔をして、本を読んだり、書きものをしている。京大にもこういう場所があったのだと、気がついた(甘かった!)。それでそういう気分にも私も染まりたくなかったのか、時折は足を運ぶことになった。

(春の図書館) 真剣な表情で勉強している人もいるが、たいていは眠そうである。春には試験もないので、みんなノンビリムードである。時々ふっと顔を上げては、腕時計をのぞきこみ、また安心したかのように眠りはじめる。そして時間が来ると、最初に開いたページを閉じて、いそいで出てゆく。

(夏の図書館) 去年から冷房が入った。それで夏の図書館は人気絶頂である。私もそれにあやかっ、だいぶ利用させてもらった。何もすることがなかったら図書館へゆく。小説を読んだり、実験のレポートを書いていたりと、夏の暑い一日が自然と過ぎてゆく。

(秋の図書館) 試験が近づく。朝早くから室内が満席になる。昼ごろ行くともう全然席がない。しかしジッと待っていると、だれかがふと席を立つ。そこへ間髪をいれずに座りこめばもうシメたもの。

(冬の図書館) 冬の図書館もわりあい利用者は多い。外ですることが少ないからかもしれない。それが、だんだん暖かくなり、学年の終りころになると、あたりの雰囲気がかわってゆく。来たるべき春のせい、みんながソワソワとしだす。利用者はだんだん減るようである。

その他、気がついたことは、室内の雰囲気は少し重々しすぎるのではないかということである。歴代の総長の肖像の他は何の飾り気もない。それがよいと言う人も多いだろうが、私なんかは、もう少し工夫をこらして、室の中の雰囲気を明るくしてはどうかと思う。

以上、4年間の学部学生生活を終えるにあたって、簡単な京大図書館の四季の素描を試みた次第である。
(工学部4回生 大山 伸)

参考室はあなたの“アシスタント”です

参 考 調 査

ある特定の事項や人物、研究に必要な文献資料の所在などについて知りたい場合には、参考図書室の資料を利用して下さい。

参考図書室には百科事典、主題専門事典、辞書、便覧、年表、人名録、地図、年鑑、統計書、全国書誌、解題書誌、総合目録、各種目録、記事索引等と洋あわせて3,380冊が集められており、自由に利用できます。この図書室におかれている資料は一般図書と性格も異なり、利用度も高いので室内での利用を原則とし、館外貸出、室外への持出はできません。ただし、閉室後も利用したい方は閉室15分前に掛員に申しでて手続きをして下さい。この場合には開架室時間内(平日午後8時
土曜 5時)に限り利用できます。また、参考室には専任の掛員がいますから、資料についての質問、相談、その他、わからないことはなんでも気軽に尋ね下さい。

質問は電話、文書によってもうけつけていますからご利用下さい。電話は(771) 8111、内線2233です。文書の場合はなるべく往復葉書か返信料を添えて下さい。

他館に資料がある場合は当館より紹介しますから、掛員まで申しでて下さい。

相 互 貸 借

国立国会図書館所蔵の図書を借りたい方、および国立大学所蔵の図書の利用(国立大学間の図書相互貸借は原則として複写によることになっています。)を希望される方も当館よりあっせんしますから、参考掛で手続きして下さい。これに要する費用は利用者の負担です。国立国会図書館一往復送料(書留)、国立大学一複写料金(含送料)。

文 献 複 写

当館では次の種類の複写を行なっています。マイクロフィルム、ポジフィルム、印画紙焼付引伸、ゼロックス。

本学が所蔵している文献の複写を希望される方は一階文献複写室(電話学内2230)へ申し込んで下さい。(詳細は静脩第4巻第1号をごらん下さい)。

当館以外の国内、国外の大学、学術機関所蔵の文献の複写を希望される方は当館よりあっせんします。国内関係は文献複写室、国外関係は参考室でそれぞれ申し込んで下さい。

ト ピ ッ ク

「京都大学七十年史」閲覧室に並ぶ

○ 長期にわたり附属図書館に編集事務局をおいて刊行をいそいできた「京都大学七十年史」が、昨年未完成した。本館には、大閲覧室内の開架図書室カウンターと、閲覧事務室の参考掛カウンターにそれぞれ2冊ずつ置かれている。明治30年に京都帝国大学が誕生してから70年を迎え、そのモニュメントとして作られた本である。大方の御一覽をお待ちしている。

——展 観

「徳川・明治期心理学関係図書展」

1月24日から26日の3日間にわたって本館陳列室において、徳川・明治期心理学関係図書展を開催した。

本展示は明治時代のわが国の心理学書を中心に、徳川時代における心学、医学、禅、儒学等における心理学書、東洋心理学関係書、静坐関係書、および京大関係者によって刊行された心理学誌等約200点（一部大正、昭和を含む）を展示した。なかでも西田幾多郎博士の第4高等学校時代における、“心理学講義”の自筆ノートが来館者の注目を集めた。

4年後にはわが国において国際心理学会が開催されるが、わが国心理学の発展を願う上にすこぶる興味のある展示会であった。本展示は教育学部佐藤幸治教授を初め、教養部紫田実教授、岡本春一博士、柿崎祐一博士、西田静子氏、および学内関係図書室のご協力によって開催し得たものである。関係者のご好意にたいして厚くお礼申しあげる。

——特別講演会

—文献と書画—

去る2月6日午後3時より、本館部長室を講演会場にして、禅僧の墨跡に関する大家、立命館大学教授淡川康一氏の標記講演会が開催された。講演の主旨は、印刷文献の洪水の中で、その著者の思想、真髓に肉迫するためには、本人の筆跡に接することこそ、肝要であるということで、ややもすると印刷された文献のみしか目にはいらない現代の文化を、酒脱な話術で批判され、仙涯和尚の真筆をはじめ、種々の原資料も被露されて、大へん有益であった。

——雑 記 帳

学外展観への資料出品記録

御存知のとおり、本学には、附属図書館をはじめ、大ていの部局図書室にも貴重文献とか、特殊文庫と呼ばれるコレクションがあって、学外のいろいろの団体が主催する展覧会に時折、出品されてきた。

ところで、ここ1年間に、そのような学外の展観への出品依頼がにわかに激増しているため、資料のなかには、文字通り席のあたたまるひまのないものさえある。何かの参考になると思われるので、ここに最近1年間くらいの間に、附属図書館があつかった展観を列举して御紹介することにした。

- 昭和41年9月9日～同21日『近代日本をひらいた人物展』東京新聞社主催、東京・小田急百貨店に「平野国臣の佩刀」を。
- 昭和42年1月7日～同18日『明治100年記念明治維新展』岡山県・市教委・山陽新聞社主催、岡山・天満屋百貨店に「吉田松陰肖像」他を。
- 昭和41年12月20日～42年2月25日『和算を中心とした日本の数学展』国立科学博物館など主催、東京・同館に榎益和澄著「参阿録」を。

- 昭和42年3月28日～4月2日『近代日本のあけぼの展』朝日新聞社主催、大阪・阪急百貨店に「吉田松陰木像」他を。
 - 昭和42年8月27日～9月4日『京都で刊行された古版本展』丸善京都支店主催、京都・同店に「慶長勅版日本書紀」を。
 - 昭和42年10月1日～11月5日『近代国家への歩み展』山口県・同県教委主催、山口・県立山口博物館に「奇兵隊日記」他を。
 - 昭和42年10月10日～同22日『明治百年展』毎日新聞社主催、東京・伊勢丹百貨店に「西郷南洲筆品川彌二郎宛書翰」他を。
 - 昭和42年11月30日～12月2日『湯浅半月展』同志社女子大学主催、京都・同大学に雑誌「東壁」他を。
 - 昭和43年1月27日～2月11日『名刀と遺品が語る明治百年展』香川県・高松市・四国新聞社他主催、高松・県立文化会館に「薩長芸三藩盟約書」他を。
 - 昭和43年2月6日～同月11日『坂本竜馬展』NHK大阪中央放送局主催、大阪・松坂屋百貨店に「坂本竜馬筆書翰」他を。
- 以上のほか、現在申込を受けているものが3種ある。

部局図書室のコンテンツ・シート・サービスについて

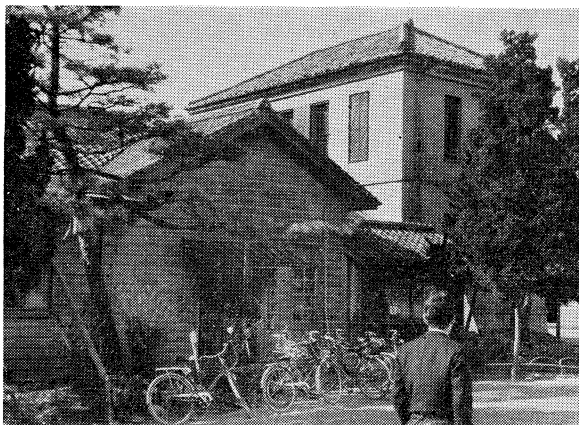
本学の部局（学部・研究所、教室）図書室の現況については、本紙の「東西南北」欄において逐次御紹介しているところであるが、各図書室とも、それぞれ工夫をこらしたサービスをおこなっており、その中にコンテンツ・シート・サービスという奉仕活動が続けているところがいくつかあって、利用者から好評を博している。

このサービスは、それぞれの図書室でとっている近着雑誌の目次をすべて収録して、編集の上、印刷配付するもので、その方法は、各図書室によって色々である。例えば、医学部のように、洋雑誌の目次ページをそのままゼロックスにうつして印刷し、医学関係の全教官に配布するところもあるし、薬学部や数理解析研究所のように、外国から雑誌が到着するより2ヶ月も早く、「カレント・コンテンツ」という米国雑誌から、自館でとっている雑誌の目次をひろって研究者に配布するところもある。また、ゼロックスを使わないで、謄写版印刷で配布するところもあり、とっている全雑誌の目次をとることが不可能な場合、最も利用の多い雑誌を、各教官毎に5種類撰んでおこなう所もある。なかには、理学部の数学教室のように、雑誌は勿論、単行本、レクチャー・ノートの目次まで紹介している所もあって、方法は千差万別だが、それぞれ、人員・予算の不足をかかえながら、よりよい図書館サービスに努めていることに変わりはない。現在すでにこのサービスをやっている図書室は、医学図書館をはじめ、薬学部、法学部、経済学部、農学部、化学研究所、数理解析研究所、基礎物理学研究所、理学部数学教室、同物理学第二教室の各図書室である。もっとも、コンテンツ・シート・サービスは所属部局、教室の利用者を対象としたものであるから、原則的に、他部局の者が利用することはできないものであるけれども、ここに部局図書室のおこなうサービスの一例を御紹介する次第である。



教養部図書室

今、教養部を訪れる古い卒業生の人々は、広いグラウンドに立って、その景観があまりにも変っているのに驚かれるだろう。4階建のビルが所せましと並んでいる。その中で、なつかしい三高時代を思い出させるものがあるとしたら、それは、教養部の図書室や書庫ではないだろうか。この建物は三高・京大のうつりかわりと、何万人もの卒業生達の青年時代を黙って見て来たにちがいない。



さてこの図書室には、現在約20万冊に近い蔵書があり、最近では1年間に約1万冊ずつ増加している。本図書室は、今年1月より、整理掛と、閲覧掛のふたつにわけられ、整理に11名、閲覧に5名の職員がいる。図書が利用できるように、毎日黙々と整理業務に精をだしている整理掛員の努力は、縁の下の力持ちとして忘れることはできないが、ここでは、主として直接利用者に接して働く閲覧掛のことをのべてみたい。

昭和36年4月、宇治分校の廃止にともない、従来の閲覧室だけではせますぎるので、あらたにグラウンドにそって第2閲覧室がもうけられた。蔵書のうち比較的使用度の高いものを選んで、在来の第1閲覧室には2,500冊、第2には1,000冊ほどが半開架として排列されている。

なお、第1閲覧室の出納室北側の空間を利用して、事務用目録検索室（和漢書は書名・著者名、洋書は著者名）にあて、また会議室を兼ねた仮参考資料室には、500冊余の辞書、事典類が排架してある。さらにこの場所で掛員に言えば、英、米、独、仏、伊、露、中国、スペイン、ポルトガル計9ヶ国語のリングフオンと、米、独、仏3ヶ国語のコーティナフォンが、それぞれテキスト片手に聴取できるようになっている。第2閲覧室では、新聞・雑誌の自由閲覧が可能である。

勿論、以上のサービスが、兼用の部屋でなく、「新聞・雑誌室」「辞書室」「聴覚室」など専用室として完備されていれば、まことに快適で申し分ないのだが、現段階ではのぞめそうもないのは残念である。

とにかく、閲覧室は2つとも、旧三高時代建築のままの木造平屋だてで、すでに甚だしく老朽化が進んでいる。われわれはいつの日にか建設されるであろう新図書室の宏壮な近代式建築の夢を心にえがきつつ、毎日の閲覧、貸出、参考のサービスに専念している次第である。

あ と が き

本号で占部教授がブカレストの大学の例として、教官の論文、著書が教室の入口に陳列してあって、学生の勉学にも大きな励ましになっていると紹介されているが、本館の教官文庫にも通ずるところがある。教官各位の理解ある御協力によって、今年度も30冊を越す著書、編書、訳書が教官文庫に加えられ、大閲覧室内の開架書架に並んでいる。この書架の前にたてば、世界に公表された本学の先学、先人の業績が光をはなっているわけで、後輩としてこれにすぎる励ましはないといえよう。同じ京大で学ぶ人々が大いに読まれることを願うものである。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 4, No. 6 (通巻21号) 1968年3月15日発行・編集発行人：

岩瀬敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771—8111 (内線) 2220～2238